



Japanese Music Education Society

News Letter

第 23 号

No.23

日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1. 報告・お知らせ	
1-1 平成 17 年度第 4 回常任理事会報告	2
1-2 平成 17 年度第 4 回編集委員会報告	5
1-3 『音楽教育実践ジャーナル』特集・原稿募集	5
1-4 学会運営検討委員会からのお願い	7
1-5 国際交流委員会規程	9
2. 大会のご案内	
2-1 第 3 回夏期ワークショップ in Tokyo	10
2-2 平成 18 年度全国大会（千葉大学）のお知らせ	12
3. 海外トピックス	
3-1 韓国音楽教育学会，表敬訪問と交流の発展	13
3-2 ISME クアラルンプール大会 参加ツアーのお知らせ	14
4. 国内トピックス	
4-1 芸術表現教育フォーラム 報告	15
4-2 国際セミナー： 「日本コロムビア外地録音の文化史的意義」報告	17
4-3 日本音楽表現学会 第 4 回大会のご案内	18
5. 新刊案内	19
6. 事務局からのお知らせ	20
編集後記	23

1. 報告とお知らせ

1-1 2005 年度第 4 回常任理事会報告

日時：2006 年 2 月 19 日（日）14：00～17:30

場所：日本女子大学新泉山館 503 室（坪能研究室）

出席：今川，岩崎，奥，小山，島崎，坪能，村尾

欠席：岩井，加藤，阪井，佐野，降矢

【報告事項】

1) 会務報告

資料に基づき事務局長より沖縄大会以降の報告がなされた。

- ・ 2005 年 12 月 16 日 音楽教育学 35-2 念校（事務局）
12 月 26 日 音楽教育学 35-2，ニュースレター No. 22 発送
- 2006 年 2 月 12 日 第 4 回編集委員会（埼玉大学東京ステーションカレッジ）
2 月 19 日 第 4 回常任理事会（日本女子大学）

・ 事務局体制について

事務局員の 2005 年 12 月 14 日付退職により，引継も含めて 11 月 30 日からアルバイト 3 名と事務局長によって月・木・金の週 3 日体制をとり，問題なく進行していることが報告された。

・ ニュースレターの編集について

ミス防止のために，原稿締切日を早めて校正に時間をかけること，校正に参事制度を導入することが報告された。

・ 地区例会開催予定が報告された。

2) 学会誌バックナンバー販売について

担当理事より，コピー・製本が完成し，メール案内と HP に掲載したところ，4 セット販売，2 セットは注文待ち状態，さらに 6 セットが販売可能であることが報告された。なお，この件についてはニュースレター 23 号に掲載予定であることが報告された。

3) 韓国表敬訪問

姉妹学会である韓国音楽教育学会を，1 月 14 日に村尾前会長と坪能現会長が通訳の裊氏（会員）と共に訪問，今後の交流について話し合われたことが報告された。（詳しくは「韓国音楽教育学会・日本音楽教育学会交流会報告」をご覧ください）

4) 文部科学省への要望書

「音楽科教育に関わる要望書」を，2005 年 11 月 13 日，文部科学省に提出したことが報告された。

5) 各委員会・担当理事報告

[1] 編集委員会

第4回編集委員会において藤田美美子委員の辞任が了承され、新たに小川昌文氏が任期を引き継ぐことになったことが報告された。

[2] 学会運営検討委員会

以下の検討項目について進捗状況が報告された。

- ・事務局改革について：口座の一元化，各種データの電算機処理，そのためのソフトウェア開発等 20 数項目の改革が進んだため，本委員会では答申の対象からはずす。
- ・会長選挙被選挙権，理事選挙の地区割，役員の任期については継続審議中である。

[3] 国際交流委員会

7月にマレーシアで開催される ISME 世界大会に向けて団体ツアーの実施を計画していることが報告された。（同封ちらしをご参照下さい）

[4] 文献目録委員会

2006 年 3 月が委員交代時期のため，今川恭子委員は山下薫子会員へ交代，斎藤博委員，本多佐保美委員は留任とすることが確認された。

[5] 企画担当理事

- ・業務マニュアルを作成したことが報告された。
- ・夏期ワークショップ，千葉大会発表募集について，島崎担当理事より，資料に基づいて報告がなされた。（詳細は同封資料をご参照下さい）

[6] 会計担当理事

日々の会計業務は順調に進行していることが報告された。なお，現在の事務局の状況に鑑みて，事務局経費検討の必要性について報告された。

6) 妙高ゼミナール会計と報告書の進捗状況

実行委員会作成の資料に基づき，事務局長より会計中間報告があり，年度内決算の予定であることが報告された。また，「報告書」については編集が遅れている旨，報告された。

7) 第 36 回沖縄大会会計報告

シャイヤステ実行委員長より提出された決算報告資料に基づいて，事務局長より，証憑を照合の上適正に支出されている旨確認したことが報告された。

8) 第 37 回千葉大会

実行委員長は宮野モモ子氏であること，会長と事務局長が 2 月 20 日に千葉大学を表敬訪問し，明石要一教育学部長，実行委員長，本多佐保美実行委員と面会する予定であることが報告された。また，沖縄大会からの引継，千葉大会の会場手配など順調に進行していることが報告された。

9) 第 38 回岐阜大会日程・会場について

日程については検討中であること，会場については国立大学法人岐阜大学と共催の形で開催を検討中であることが，会長より報告された。

【協議事項】

1) 韓国音楽教育学会とのこれからの交流について

内容の検討については学会運営検討委員会が担当することに決定した。基本的分担として、折衝は会長、広報は国際交流委員会が担当することが話し合われた。以下は検討事項と内容である。

(1) 論文(学会誌)交換:「特別寄稿」のような形が適切であると考えられる。学会誌検討委員会付託。

(2) 学習指導要領の交換:早速日本語版を相手方会長宛に送付する。国際交流委員会担当。

(3) 共同ゼミ:名称,時期等について検討することとなった。2008年度夏期ゼミナールを前倒しで開催する方針。企画担当理事が実施体制等について検討する。

(4) 研究授業見学などによる情報交換:2006年度は会長が筑波大学附属校を紹介する。以後は対象校を順に回していくことに決定した。

2) 40周年記念企画について

2009年に迎える創立40周年に向け、記念誌、記念出版などの可能性について議論された。

3) 参事制度について

ニュースレターの校正,ワークショップちらし作成・受付等,大会発表申し込み関係,会長業務・会計業務補助,姉妹学会の通訳等について参事制度を導入すること,参事の推薦は各業務担当理事が行い,持ち回り審議の結果を受けて4月に発足することが決定した。

4) 新入会員及び退会者の承認

<新入会員>

3311	平田 裕司	兵庫教育大学大研究生
3312	中島 光幸	ペースメソッド研究会
3313	和田 崇	江戸川区瑞江中学校
3314	萬 由美	
3315	山口加奈子	福岡教育大学院生
3316	渡会 純一	仙台市立西中田小学校
3317	平良その子	琉球大学教育学部附属小学校
3318	西村美紀子	千葉県印西市立木刈小学校
3319	上條 貴志	荒川区立第七中学校
3320	坂本久美子	山口芸術短期大学

<申し出退会者>

0666	安藤久仁子	
1142	室星 敦郎	昭和音楽大学
1042	渡辺 麗子	久我山音楽研究室

2月17日現在正会員数 1579 名

1-2 平成 17 年度第 4 回編集委員会報告

学会誌編集委員会 委員長 木村次宏

平成 18 年 2 月 12 日(日)に、埼玉東京ステーション・カレッジにおいて、平成 17 年度第 4 回編集委員会が開催され、下記の議題等について検討された。

- ・藤田美美子委員の退任について
- ・再投稿原稿（「音楽教育学」および「音楽教育実践ジャーナル」）の再査読等の結果について
- ・投稿原稿（「音楽教育学」7 件）の査読結果について
- ・新たな投稿原稿（「音楽教育学」1 件）の査読者等の決定について
- ・「音楽教育実践ジャーナル（通巻 6 号・7 号）」の進捗状況について
- ・今後の学会誌の発行予定および担当者等の確認について
- ・その他

<お知らせ>

- ・編集委員会からのお知らせを、学会ホームページに掲載させて頂くことになりました。今後、募集原稿の案内等についてご参照ください。

<お詫び>

- ・「音楽教育学（第 35-2 号）」の巻末に記載されている編集委員名簿の一部が前委員の名前になっていました。関係の方々にお詫び申し上げます（正しくは「音楽教育実践ジャーナル（vol.3 no.1）」等でご確認ください）。

1-3 『音楽教育実践ジャーナル』 vol.4 no.1(通巻 7 号)特集・原稿募集

『音楽教育実践ジャーナル』通巻 7 号（2006 年 8 月発行）の特集に向け、下記の要領で原稿を募集いたします。会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、投稿の際には、特集への応募原稿であることを明記してください。

テーマで意図している「諸民族の音楽」とは、「民族あるいは一定の社会集団などの中で共有され、伝承され続けてきた音楽の総体」（『民族音楽概論』東京書籍 1992 年）

を指し、ここでは日本は含めないものと規定します。

戦後の学習指導要領における「諸民族の音楽」の扱いについては、すでに昭和 22 年に試案として出された中に「広く各国の民謡を聞かせるとともに民謡に取材した音楽を聞かせる」という一節があります。しかし、より広範な意味としての諸民族の音楽は、昭和 33 年の学習指導要領に示された「郷土の音楽、各種の民謡および民族音楽などについて、それぞれの音楽の特色ある美しさを味わわせる」の中に出てきたのが最初ではないかと考えます。

その後、音楽科の授業の中で「諸民族の音楽の扱い」が目立ってきたのは、平成元年に学習指導要領が告示されたころからではないでしょうか。このことから教育雑誌などで特集として組まれることも多くなってきました。この理由の一つには、中教審答申における国際性との関係が挙げられます。また、諸民族の音楽を授業に取り入れることによる子どもの活動の広がりを挙げることも一因でしょう。こうして「諸民族の音楽」はこれまでに数多くの実践例がなされ、各地の研究会や出版物を通して、かなり行き渡ってきていると考えられます。その一方で、表面的な「諸民族の音楽」の扱いしかしていないのではないかと、あるいは扱う音楽がマニアックなものであり、他の人に参考にならないといった批判もあります。

そこで本号では、これまで行われてきた「諸民族の音楽」の実践を振り返り、その実践を検証しつつ新しい知見を得て、音楽の授業における「諸民族の音楽」の位置づけと実践の意味を再考したいと考えました。

今回の特集では次の 3 種類の原稿を募集します。

(1) 「諸民族の音楽」を教材とした実践報告

先行実践事例があり、その実践をベースにして自分として新たにとらえなおしたという実践事例を募集します。すなわち、これまでに自分が行った実践を検証し、更なる進化した実践例を求めています。また、自分が行った実践でなくても、雑誌などに掲載された実践報告を読み、「自分はこういう視点からやってみた」という実践例でも結構です。

その場合、先行実践についての検討を必ず行ってください。書式、字数などは『音楽教育実践ジャーナル』投稿規程をご覧ください。

(2) 私のオススメ CD & DVD (または VTR など)

「諸民族の音楽」に関する CD, DVD, VTR などの中で、「いろいろな音楽の価値」が発見できるようなものをご紹介します。その際、どのような使い方をされたのかについてもごく短く書いてください。お一人何点でも結構ですが、字数は合計 1000 字～2000 字程度でお願いします。また、出版元と CD 番号（できれば購

入した店名)も忘れずにご記入ください。輸入盤,または現地で購入された時にはその旨をご記入ください。

(3) 「諸民族の音楽」情報アーカイブ

「諸民族の音楽」は多岐にわたっています。したがって,論文を書いたり,教材研究をするための情報をいかにして得るかという課題に直面している人も多いと思います。そこで,「諸民族の音楽」の研究資料として役立つ書籍や音源を所蔵している公共機関や図書館をご紹介ください。また,インターネットのサイトなどもご紹介いただければと思います。「諸民族の音楽」全般,あるいはある特定の地域,どちらでもかまいません。(字数 600 字~1000 字程度)

記

- 特集タイトル:「音楽科授業における『諸民族の音楽』の指導内容を再考する」
- 原稿締切り:2006 年(平成 18 年)5 月 20 日 私書箱必着
- その他:採択された原稿については,編集委員会から 6 月末日までに投稿者に連絡いたします。

1-4 「学会運営検討委員会」からのお願い

学会運営検討委員会 委員長 村尾忠廣

「学会運営検討委員会」では,会長の諮問を受け,非常に大きな学会運営に関わる事項を検討しております。その中には,1)地区割り,2)会長・理事選挙,3)会長・理事任期,4)会則の整合性などの問題が含まれ,選挙日程上,今年の大会総会にて決議される必要があります。大きな改革となりますので,会長に最終答申する前に,理事会・常任理事会において中間答申をしながら,意見の集約を図っているところです。しかしながら,事前に一般会員のみなさまの意見を広くお伺いしながら,これらの意見を反映できるような答申をしたいと思っております。もちろん,委員会の答申を踏まえながら,会長判断による提案が理事会に図られ,さらに総会の議題となって最終的な決議となります。

問題は,総会の中では十分な議論する時間がとれないことです。しがたいまして,以下の検討事項につきまして,会員のみなさまから直接,学会運営委員会へご意見をお寄せいただきたくお願い申し上げます。ご意見は,学会事務局宛にメールで直接お送りください。

アドレスは次の通りです。 e-mail: onkyoiku@remus.dti.ne.jp

1. 地区割りの再検討について

① 第1回の中間答申では、北海道―東北、北陸―東海、中国―四国を合同し、全国を6ブロックとする案を提示した。この案は、どの地区からも定数2名の理事を選出し、残りは全国区とするという選挙区改革を前提としていた。

② しかし、北海道―東北、北陸―東海の合体案には、難色を示す理事が少なくなかった。そのため、合体は中国―四国に留め、基本的には従来型の会員数に応じた地区選出をおこなうが、理事定数は従来の25から20名に減じる。

③ もう一つの有力な案は、地区の合体は中国、四国に留めて全国を8ブロックにするものの、選挙では地区代表として各1名、計8名を選出し、残り12名を全国区選出する、という考え方。

上記3案の他にもいろいろバリエーションがあります。それぞれ細かい難があって、委員会としても統一見解がまだだせない状態です。

2. 会長の直接選挙について

立候補・推薦による会長の直接選挙が2度おこなわれました。2度とも候補者一人でしたので、この選挙の見直しが必要となりました。学会運営検討委員会では、今のところ、立候補・推薦という制度を廃止し、一定の条件を被選挙人に課した上で直接選挙をおこなう、という案が有力です。条件は、10年以上の会員歴があり、理事の経験を有するもの、というような案が考えられています。

3. 会長、理事の任期について

学会の理事の任期は国の内外を問わず、ほとんどの場合、1期2年となっていますが、本学会は平成8年から1期3年に変更されました。会長からの諮問は、この任期を再検討するように、ということでした。3年に変更された理由は選挙にお金がかかる、ということだったようです。しかし、3年に1回と2年に1回の差額を年平均に換算しますと、理事一人の旅費程度の差額でしかありません。金額的に問題になるものではありません。それよりも、委員会で問題としているのは、2年ごとの選挙が逆に短すぎて「また、選挙？」という感じにならないか、ということです。理事に就任して翌年はもう選挙というわけですから。かつて1期2年の場合、3期まで再任が可とされていました。1期3年の現会則では2期となっています。委員会では、1期2年とした場合、再任は2期までとしたらどうか、ということが話しあわれています。

当委員会は、会長の諮問委員会ですので、本来、会長に答申すべきであって会員に途中経過を公表すべき性格のものではありません。しかし、問題の性格上できるだけ事前に途中経過を公表し、会員みなさまの意見を反映して最終答申した方がよい、ということになりました。繰り返しますが、総会にいたるまでには、答申をもとにした会長判断、そして理事会提案、それから総会提案というプロセスがあります。総会での「限られた時間の

議論」を円滑におこなうためにも会員のみなさまのご意見を広く承りたいと思います。どうか、よろしくご検討くださいますよう、お願い申し上げます。

1-5 「国際交流委員会」規程について

昨年 10 月に開催されました理事会におきまして、「国際交流委員会規程」案が承認されました。下記の内容となっておりますのでご報告いたします。

平成 17 年 10 月 28 日制定

日本音楽教育学会国際交流委員会規程

第 1 条 学会会則第 14 条 6 項にもとづき国際交流委員会（以下委員会）をおく。

第 2 条 この委員会は、以下の事項を取り扱う。

- (1) 音楽教育に関する外国の資料，研究物の蒐集
- (2) 外国の音楽教育関係学会との資料，研究物の交換
- (3) 外国の音楽教育関係学会との研究交流
- (4) その他，国際交流の目的達成のために必要な事項

第 3 条 委員会は、会員の中から選ばれた下記 5 名の委員をもって構成する。

- (1) 本学会の専門研究分を考慮して，理事会が推薦する委員 3 名
- (2) 理事の互選による委員 1 名
- (3) 常任理事の互選による委員 1 名

第 4 条 委員は任期を，2 年とし，連続 2 期を越えないものとする。ただし，理事，常任理事の委員は任期を 1 期 3 年として再任できない。

第 5 条 委員会に委員長および副委員長各 1 名をおき，委員の中からそれぞれ互選する。委員長は委員会を招集し，その議長となる。副委員長は委員長を補佐し，必要に応じてその職務を代行する。

第 6 条 委員会は，毎年 1 回以上全委員による会議を開き，国際交流に関する事項について協議決定する。

附 則

1. この規程は平成 17 年 10 月 29 日より実施する。

2. 大会のご案内

2-1 日本音楽教育学会第3回夏期ワークショップ in Tokyo

2006 年度日本音楽教育学会第3回夏期ワークショップ in Tokyo は、7 月 22・23 の両日、東京学芸大学音楽科ホールで、大石哲史さんと熊木眞見子さんを講師に迎え、下記のように A・B 2 コースのワークショップを行います。

会員の皆様の積極的な参加をお待ち申し上げます。会員以外の方々にも、夏期ワークショップを、是非、ご紹介下さいますようお願いいたします。

会費は、7 月 22・23 の両日で 6,000 円（非会員 7,000 円）。1 日だけ参加の場合は 4,000 円（非会員 4,500 円）です。同封チラシの申し込み用紙に必要事項を記入の上、6 月末日までに本学会事務局宛にファックスされるか、郵送にて申し込みください。両講座とも動きやすい服装、運動靴などでご参加ください。

A：パフォーマンス・コース

《自然で自由な「こえ・ことば・うた・からだの表現」の探究》

日時：2006 年 7 月 22 日（土）12 時 30 分～17 時 00 分

講師：大石哲史（1977 年京都芸術大学声楽科卒業。

1981 年オペラシアターこんにゃく座入座）

A：パフォーマンス・コースのワークショップは、音楽教育に携わるものとして、表現の原点と可能性を発見したいと企画しました。

ワークショップ・リーダーは、オペラシアターこんにゃく座の大石哲史さんです。大石さんは、座の中心的歌役者として「ゼロ弾きのゴーシュ」「フィガロの結婚」「ハムレットの時間」のタイトルロール、「魔法の笛」のパパゲーノ、「金色夜叉」の貫一、「イヌの仇討ち」の吉良、「十二夜」のフェステなど、年間 200 回を超えるステージで活躍される一方、からだとことば、うたのありかたについて探究し続け、全国各地の

劇団や合唱団などで、独自の理論にもとづいてワークショップを行い、一人ひとりの個性に即した具体的で、的確な指導で人々を魅了し続けています。

第3回夏期ワークショップのパフォーマンス・コースでは、大石さんのご指導のもとに、力を抜いたしなやかな身体がどのくらい自由で豊かな表現を生むか、そのような身体から発せられるこえ、ことば、うた、からだの表現がどのくらい自由で豊かなものであるのかを体感したいと思います。そして、このワークショップを通して、日本語が自然に語られ、歌われ、表現されることの楽しさを見出し、その人らしい表現の

可能性を感じることを目指したいと思います。

大人も子どもも、もっとその人らしく自由に自然な表現ができれば、どんなに表現の喜びが広がることでしょうか。「こんにやく座」のレパートリーをテキストに、朗読や歌唱や演技を試みながら、「こえ・こと

ば・うた・からだの表現」の地平をご一緒に拓きましょう。音楽教育に携わる多くの皆様のご参加を心からお薦めいたします。できれば、短い詩の朗読や短い歌（伴奏なし）をご用意ください。各自、昼食を済ませてご参加ください。

B：授業づくり・コース

《 音・あそび・動き 》

日時：2006年7月23日（日）10時00分～15時30時

講師：熊木眞見子（筑波大学教育学部附属小学校教諭・副校長補佐）

B：授業づくり・コースのワークショップは、小学校の現場で、子どもたちが楽しく活動しているうちに、音楽の要素や基礎基本が身につくような音楽教育が実現できたらと願って企画しました。

ワークショップ・リーダーは、筑波大学教育学部附属の小学校熊木眞見子さんです。熊木さんは、日本オルフ研究会で中心的な役割を担い、全国各地で講演やワークショップを行い、豊富な教育実践を重ねています。

第3回夏期ワークショップの授業作り・コースでは、小学校低・中学年向きの、楽しい活動をご紹介します。どの活動もすぐに準備ができ、難しい技術も必要とせずに、比較的短時間で行えるものばかりです。そして、楽しく活動しているうちに、いつのまにか音楽の要素を子どもたちが感覚的にとらえられるようにと考えられています。

これらのあそびや動きは、本来は、音楽の授業の中で「音あそび」として取り上げたり、授業への導入に使ったりするための活動ですが、その他、異学年同士の交流の場や地域の人々との交流の場などでも、雰囲気をやわらげ参加者同士が仲良くなるための活動のひとつとして、さまざまに活用でき、誰でも楽しく取り組める活動です。

昨今子どもたちも大きく変わってきており、授業に困難を感じられる先生方もいらっしゃるでしょう。このワークショップを通して、きっと子どもたちの喜ぶ音楽活動の具体的なヒントが得られることでしょう。小中学校の先生方をはじめ、多くの皆様のご参加を心からお薦めいたします。会場付近に食堂がございませんので、各自昼食をご用意ください。

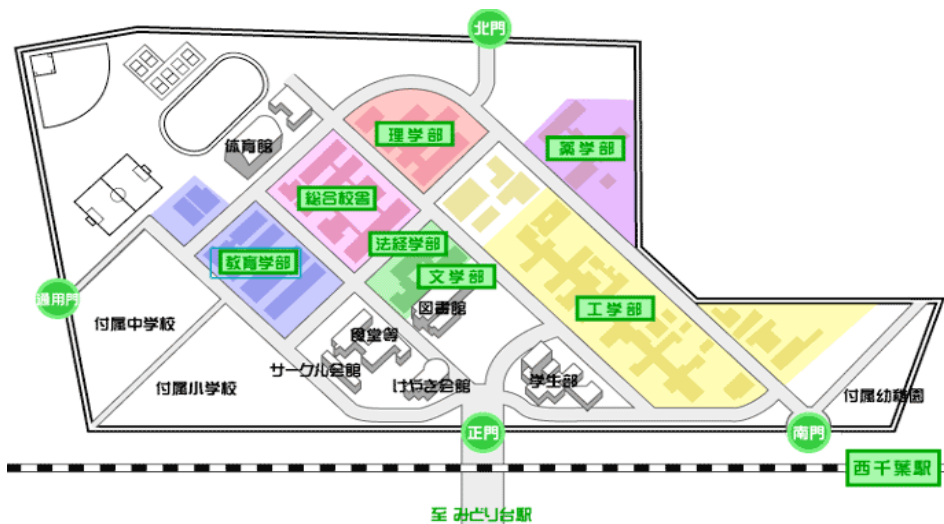
2-2 第37回全国大会(千葉大会)のお知らせ

大会実行委員会委員長 宮野モモ子

日時： 平成18年10月28日(土) 29日(日)

場所： 千葉大学 教育学部 (千葉市稲毛区弥生町 1-33)

*** 教育学部は西千葉地区となります。



みなさまのご参加をお待ちしております。発表申し込みについては、同封の案内および学会ホームページをご覧ください。

詳細は次号でお知らせいたします

3. 海外トピックス

3-1 韓国音楽教育学会・日本音楽教育学会交流会の報告

日本音楽教育学会会長 坪能 由紀子



左から3人目が坪能会長で、その右隣が B.H. Whang 会長

韓国音楽教育学会と日本音楽教育学会は、3年あまり前に姉妹学会となりましたが、その後実質的な交流があまり行われないうちになっていました。そこで前会長の村尾忠廣氏、国際交流委員で姉妹学会担当の田中健次氏に事前のご準備をいただき、2006年1月14日ソウルで両学会の交流会を持ち、今後の交流について話し合いをすることになりました。

出席者は韓国側から会長のファン・ビョンファン氏（ギョンイン教育大学）、副会長のハム・ヒジュ氏（ゴンジュ教育大学）、クォン・トックウォン氏（常任理事、ギョンイン教育大学）、ソク・ムンジュ氏（常任理事、ギョンイン教育大学）の4人、日本側からは村尾忠廣氏、坪能、及び通訳としてベ・ミンギョン氏（日本女子大学博士課程）の3人。ソウル市内の「ジファガ」というレストランで韓国のおいしい料理をいただき

ながら、なごやかでうちとけた雰囲気の中、さまざまな積極的な提案が出され、活発な意見交換が行われました。

以下に交流会の内容と、それをうけてのその後の日本側での取り組みについて報告させていただきます。

日本側からは次の4点が提案されました。

- 1 両学会大会等について、開催日時の事前連絡と相互参加の呼びかけ
- 2 それぞれの学会誌の交換
- 3 両学会で組織改編があった場合（たとえば今回の日本側のように、会長や事務局長の交代）の連絡
- 4 相互の学会誌への互いの論文の掲載

4については、翻訳の問題、また両学会の投稿・査読システムの違いなどに鑑み、両学会で検討しつつ実現に向けて努力することになりました。その後2006年2月19

日に開催された日本音楽教育学会常任理事会でこの件について審議され、学会誌検討委員会に検討が委ねられることとなりました。

韓国側からは次の2点について提案されました。

1 「学習指導要領」の交換

2 研究授業などの情報交換

1 については常任理事会で審議され、まず国際交流委員会から日本の現行「学習指導要領」及び「学習指導要領解説」を送ることになりました。

また、2 については、2月16、17、18日に行われた日本での研究授業など（筑波

大学附属小学校及び東横学園小学校の研究授業、公立文化施設協会のワークショップ・コンサート）が交流会で紹介され、ソク常任理事以下4人の方が既に来日して研修をされています。来年度からはもう少し早めに準備して互いの催し物についての情報交換を行いたいと考えています。

交流会では日韓共同ゼミの可能性も模索されました。常任理事会では、実施の方向に向けて企画担当（阪井，島崎，降矢氏）を中心に、場所，時期，内容などを今後検討していく予定です。

3-2 ISME（国際音楽教育協会）クアラルンプール大会 参加ツアーのお知らせ

国際交流委員会

ISME International Society for Music Education は、90ヶ国が所属する音楽教育者のための世界的なネットワークです。世界大会が2年おきに各国で開催されており、今回は2006年7月16-21日にマレーシアの首都クアラルンプールで行われます。1992年のソウル大会以来、14年ぶりのアジアでの開催になり、日本からの多数の参加が期待されています。

ISME 世界大会の魅力は、世界各地の音楽や音楽教育に関する情報が一度に集まり、さまざまな側面から音楽教育の国際的な動向を体感できる点にあります。国際色豊かな演奏会やワークショップ、研究発表、シンポジウム、展示と魅力ある催しが充実し

ています。研究発表は英語ですが、世界各地からの子どもたちや専門家の演奏では、まさにことばの壁を越えた＜音楽によるコミュニケーション＞を実感することができそうです。ISME 大会は、国際的な視点から日本の音楽教育を、そして自身の実践や研究を見つめ直す絶好のチャンスです。すでに参加されたことのある方はもちろん、初めての方もどうぞこの機会に参加されてはいかがでしょうか。

マレーシアは治安もよく、鳥インフルエンザもない国で、参加しやすい条件が整っています。また ISME だけでなく、マレーシアの音楽や文化に触れるまたとない機会でもあります。各種学校の夏期休業にも重

なりますが、必要に応じて本学会から勤務先へ、派遣依頼状を発行することもできます。

今回は、会員のみなさまが参加しやすいように、本学会の後援のもとに日通旅行に参加ツアーを企画して頂きました。同封のチラシに概要が掲載されていますが、12万円代のコースもあり、夏のシーズン中としては大変リーズナブルな価格です。学生・大学院生のみなさんにも参加いただけるのではないかと思いますし、デラックスホテル宿泊のコースも比較的安価にご利用いただけます。さらにオプションの研修ツアーを選択できる12日コースもあります。

ツアーに参加する主なメリットは、以下の4点です。

- 1) 面倒な飛行機や宿の手配が不要（ツアー全ホテルが会場へ徒歩圏内）。
- 2) 参加者同士でISMEの情報交換が可能（不安は解消，感動は共有）。
- 3) 大会の参加登録手続きが追加料金で代行可能（ご自身でも登録できます）。
- 4) 大手旅行社なので何かの際の危機管理に信頼感（現地日通支店が対応）。

詳細は、チラシの担当者にご連絡頂ければ、パンフレットを通じて入手できます。興味をお持ちの方は、まず日通旅行へご連絡下さい。ISME大会の詳細は、本学会のホームページ「関連団体のページ」からリンクすることができます。みなさまの積極的な参加をお待ちしております。

4. 国内トピックス

4-1 芸術表現教育フォーラム 報告

石川 眞佐江（東京芸術大学）



基調対談（佐藤学・河邊貴子）

去る2005年12月18日、立教女学院短期大学において「芸術表現教育フォーラム」（企画者：佐野靖・今川恭子）が開催された。科研費研究の一環として催された本フォーラムは、副題を「子ども・遊び・ア



分科会

ト」と称し、専門や立場，経験を超えて，芸術・表現教育やアート，子ども，遊びなどについて自由に論じ合い，学び合って相互の交流を深めることを目的としたものである。

当日は、全国からおよそ 150 人を超える参加者があった。参加者は音楽教育研究者から幼児教育の専門家、現場の保育者、教師、美術教育や教育学を専攻する院生など多岐に渡り、芸術表現教育の包括する多様な領域と視点を窺わせた。

まず基調対談として、佐藤学氏（東京大学）と河邊貴子氏（立教女学院短期大学・同付属幼稚園）による対談が行われた。幼稚園園長でもある河邊氏は、「幼児における表現」を取り上げ、幼稚園のクリスマスをめぐる遊びの事例を提示して、表現の原点についての話題を提供した。幼児にとっては、「遊び」そのものが表現であり、その表現を他者が受け止め、あらわし返すことにより、遊びが展開し、育まれていく。つまり、遊びこむことにより、子どもの芸術性が培われると言える。特に「ごっこ遊び」は身体活動を伴うという意味で重要であり、他者と共に活動することで、その相互作用により表現が育っていく過程が示された。幼児は表現を通じて他者や自己や周りの環境すべてと「つながり」を確認することができ、自分の表現が認められる喜びを感じることができる。

「遊び」という相互作用を通じて自分の表現をつくり、他者とかかわっていく、これは幼児教育に限らず、年齢を超えて不可欠な営みではないかと感じられた。一方で、こうした自然の発露としての表現は、本来他者による評価を必要としたものではない。一人で遊びに没頭する幼児は一心にその行為をする自分と向き合っているとも言える。このような時間にこそ、自己を内省する気持ちが育っており、それこそが表現する主

体としての自分を作り出しているのではないかと感じた。

佐藤学氏は、学力低下に際し、従来の「芸術教育」の枠には収まらない「アートの教育」の必要性を提唱した。学びの機能はアートの要素に支えられている。アートとは、生きる技法であり、もうひとつの現実、もうひとつの私、もうひとつの世界など、一人一人の抱えている「秘密」からあらわれてくるものを享受することである。幼児によく見られる、「かのようにふるまう」「なってみることは、もうひとつの世界と出会う重要な手段のひとつである。

また、佐藤氏は音楽を例に挙げ、表現は抑制することによって「わざ」になっていくのであり、現代の音楽教育において「型」の教育、「抑制」の教育を行っていないことの弊害を指摘した。型とはそれを習得することによって、ある文化の一番持っているエネルギーをコントロールした精神を学ぶことであると言える。文化の背景とも言い換えられるだろうか。型を無視して白紙の生活背景に作品だけを提供しても、その教育方法には限界があろう。しかし、私見では、佐藤氏は学校教育のみにばかり多大な期待（の裏返しの無力感）を抱いているように感じられた。子どもは本来、学校や幼稚園のみで生活するものにあらず、根本から彼らをはぐくむ家庭や地域などの場こそが大きな背景になり得るはずである。しかし、実際にはこの双方が失われつつあるという状況に際し、背景のないところで子どもを育てていることの土台のなさを憂慮すべきではないだろうか。

基調対談に続いては、3 会場に分かれて

分科会が行われた。分科会 1 は「生活をつくる、表現を育む—幼児からの発信」と題し、今川恭子氏（立教女学院短期大学）と井口佳子氏（中瀬幼稚園園長）により、幼稚園における事例が提示され、特に環境構成と幼児の表現についての議論が行われた。

「里山のような場所をつくりたい」という井口氏の言葉が大変印象的であり、環境を構成することの面白さと難しさを感じさせられた。

分科会 2 は「かかわりをつくる、音を介した自己表現を支える—障害をもつ子どもの現場から」と題し、今井康雄氏（東京大学）の進行、今野貴子氏（立教女学院短期大学）の話題提供により、障害をもつ子どもたちの表現を支える実践についての議論が行われた。AD/HD の A 君（兄）と健常児の B ちゃん（妹）の音楽療法集団セッション、精神遅滞 C 君の音楽療法個人セッションの紹介をもとに、音楽療法の目的や機能、意味といった幅広い問題につながる議論が展開された。

分科会 3 は「音楽をつくる—小学校現場から」と題し、佐野靖氏（東京芸術大学）

の進行、江田司氏（和歌山大学附属小学校）の話題提供と東京芸術大学の院生 2 人を交えた討論により、活発な意見交換の場となった。「空」をキーワードに「曲想」そのものをつくって表現することを試みた江田氏の事例は、様々な方向に議論が発展する可能性をもった実践となっており、実践者に率直な質問や意見を投げかける院生とのやりとりにより、音楽をつくる授業の多様な側面や、言葉と音楽と動きを語ることの難しさを浮き彫りにする討論が展開された。

基調対談、3 分科会共に、芸術表現教育の根幹にかかわる深い問題が提起され、非常に興味深いフォーラムであった。参加者からのより活発な意見交換の場を設けることや、さらに多様な専門領域の研究者、実践者と交流し、議論を深めることで、芸術・表現・教育という 3 つのキーワードを総合的に捉えていく視点が生まれるのではないだろうか。今後の議論、研究の発展が期待される。

4-2 国際セミナー「日本コロムビア外地録音の文化史的意義」報告

権藤敦子（エリザベト音楽大学）

さる 2 月 18 日から 20 日に、大阪にある国立民族学博物館において、日本コロムビアが 20 世紀前半に中国、台湾、朝鮮、満洲において制作・販売したレコードに関す

る国際セミナーが行われた。

全体は 8 つのセッションに分かれており、福岡正太氏（国立民族学博物館）の開会の辞、細川周平氏（国際日本文化研究センタ

一) による基調報告に続き、満洲録音、朝鮮録音、上海録音、台湾録音をめぐり、山内文登氏(韓国学中央研究院韓国学大学院)の「植民地朝鮮におけるレコード産業の構造」、李 晋源氏(韓国芸術総合学校伝統芸術院)の「韓国留聲機音盤の研究現況および展望——コロムビア留聲機音盤を中心に」、李 輔亨氏(韓国古音盤研究会会長)の「韓国における音盤学の位相と役割」、王 櫻芬氏(國立台灣大學)の「台湾を聴く——コロムビアレコードの台湾音楽史における意義」、徐 亞湘氏(中國文化大學)の「もう一つの伝統劇音楽聴——日本統治期の台湾伝統劇のレコードより論ず」、范 揚坤氏(國立台灣師範大學)の「時代の声——日本統治期の刊行録音、その現代台湾北管音楽研究における啓発と課題」と題する発表と討議がなされた。また、コロムビア創立70周年を記念して編集された『中国伝統音楽集成——史料としての SP 原盤復刻』(1980)について、監修者である三浦 勝利氏(内山書店)にお話し頂くとともに、日

本での調査の進捗状況を、劉麟玉氏(四国学院大学)他の参加者が報告した。

韓国では「韓国古音盤研究会」を中心に、音盤書誌 Discography にとどまらず、音盤学 Discology の構築を目指して、学術大会の開催、定期刊行物の発刊もなされている。また、台湾では、『聽到台灣歷史的聲音——1910~1945 台灣戲曲唱片原音重現』、礪溪文化學會編(2000)の発刊を機に、日本統治期の台湾レコード研究が進展しているという。日本資本による海外の録音であるが、国内での研究は緒についたばかりであり、各国の研究状況に啓発されるとともに、今回のセミナーを契機として、国際的な連携の第一歩が踏み出された。

当面、国立民族学博物館に所蔵されている資料を中心に、日本でのディスコグラフィの出版と CD の制作が企画されているが、伝統音楽、民謡、流行歌など、現在では聴くことのできない膨大な録音の整理が進むことによって、音楽教育研究の視点からも興味深い資料となるであろう。

4-3 日本音楽表現学会・第4回大会 (グリーン・アベニュー大会)のご案内

岡山大学 奥 忍

「日本音楽表現学会」という学会をご存じですか。この学会は、音楽表現に携わる音楽家、研究者、教育者などが集まって、音楽に対する思いを研究的な側面から共有し、音楽表現学を確立しようとする目的で2003年5月に設立されました。年1回の大会、機関誌『音楽表現学』、年3回の「ニ

ューズレター」の発刊を中心に、各種演奏会や講演会、イベントの後援、その他さまざまな活動を行っています。

現在180名の会員の専門分野は、声楽、ピアノ、管弦打楽器、作曲・指揮、邦楽などを含めて音楽表現に直接関わるメンバーが2/3を占め、また、音楽教育や音楽学

など理論系のメンバーにも演奏をバックグラウンドにしている人が多くみられます。このような会員の構成が、この学会の研究方向と雰囲気象徴していると言えるでしょう。

2006年度の大会は6月17日(土)～18日(日)に岡山大学で開催予定です。基調講演には五嶋みどり氏を迎え、続いて五嶋みど

り氏、津上智美氏、松本勤氏によるシンポジウム「音楽家の活動ーコミュニティー・エンゲージメントー」を開きます。会員による口頭発表やワークショップも数多く予想されます。音楽表現に熱情を傾けていらっしゃる方は、是非一度覗きにいらしてください。

5. 新刊案内

1) 阪井恵・小山真紀・木暮朋佳・中里南子 『五線譜の約束』

明星大学出版部 2006年1月

このたび上記の本を出版いたしました。初等教員および保育者養成課程の楽典のテキストとして、これまで手作りしていた教材を編み直したものです。五線譜の読めない学生の感覚に寄り添うように努めました。類書とは異なる特長を出したつもりです。練習問題や楽語集をつけて、採用試験対策も視野に入れています。ご関心があれば、明星大学出版部にお問い合わせください。(著者一同)

2) 坪能由紀子、長橋晴子、野本由紀夫著『シング・ウォーク・ダンス』

(楽譜集、音楽之友社,2005)とCD(日本アコースティックレコーズ,2006)

基本的には幼稚園、小学校の教員養成のピアノ・テキストとして書かれている。タイトルにあるように、シンプルで馴染みのある歌、行進曲、舞踊曲の他、「音楽の広がり」としてポピュラー音楽、現代曲、日本やアジアの外国曲などできるだけ多様な曲、そしてブルース音階、教会旋法、半音音階などにもとづいた即興等が含まれている。多くの人が楽しんで取り組める曲集を目指した。楽譜集のほとんどの曲を収録したCD付き。(坪能)

3) 安田寛『「唱歌」という奇跡 十二の物語』—賛美歌と近代化の間で—

文芸春秋 2003

『近代唱歌集成』の仕事の中からエッセンスとして選んだ唱歌十一と童謡一つを取り上げたのがこの本です。それまでの可能な限り一次資料を採求して書いたものと違って、可

能な限り二次文献を読破したとき何が見えてくるか、ということで書いたものです。書き終わった時に見えてきた結論を「はじめに」に書いています。唱歌の誕生はまれにみる幸運が重なった奇跡のような出来事だったと。これはまだ十分には展開していませんが、次作のお楽しみです。(安田)

4) 南曜子, 今村方子, 今川恭子『心を育む子どもの歌』
教育芸術社 2005

「心を育む子どもの歌」を出版するにあたって心がけたことは、この本を使用する学生さんたちを大人として扱うことでした。本著の『コラム』欄には、大人として、子どもの感性と子どもの歌の教育力を冷静に見抜く保育者に育って欲しいという私たちの意図が込められています。一方、この本の実際的な使用目的は、子どもの歌の弾き歌いのレパートリーを増やすことで、バイエル程度の運指法をある程度マスターした学生が対象です。弾き歌いは弾き歌いの学習経験を通してしか身につかない…養成機関はこのことを真剣に考える時期にきているのではないかと、密かに一石を投じたつもりです。(南曜子)

*** 新刊案内について、今回は著者に 200 字程度で紹介文を書いていただきました。今後は、会員皆様の著作を出来るだけご紹介できるよう準備を進めてまいります。そのためにも、下記の要領で学会事務局まで原稿をお寄せ下さい。随時受付をしています。

① 著者名, ②著書名, ③出版社, ④発行年, ⑤200 字程度の紹介文 ***

6. お 知 ら せ

6-1 平成 17 年度音楽教育関係文献リスト作成へのご協力をお願い

本学会では学会活動の一環として、会員各位からの報告に基づく文献リストを学会誌に掲載し、会員相互の研究交流を行なっております。

本年度も、「平成 17 年度音楽教育関係文献リスト」を 6 月発行予定の学会誌『音楽教育学』36-1 号に掲載いたします。下記の要領で、著書、論文等研究成果を事務局までお知らせいただけますよう、お願い申し上げます。

なお、この文献リストは「音楽文献目録委員会」に報告され、同委員会において『音楽文献目録』第 34 集への掲載が検討されることになっております。

記

1. 申請方法 ※今年度から電子メールのみでの受付となります。

申請用紙（別途お手元に送付された見本をご覧ください）を学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html> から入手（ダウンロード）の上，必要事項を記入し，添付ファイルで下記事務局電子メールアドレス宛お送り下さい。ダウンロードができない場合は，必要事項をメール本文にご記入ください。

事務局電子メールアドレス：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

申請締切: 2006 年 4 月末日(必着)

2. 申請範囲

2005 年 4 月より 2006 年 3 月末日までに発行された著書，論文等といたします。申請いただく研究成果とは，著書，翻訳書，学会誌・研究紀要・専門誌・論文集などに掲載された論文，学位論文などを指します。原則として申請内容はそのまま学会誌に掲載されますが，短い記事や解説，その他内容によっては掲載されない場合もございますので，予めご了承ください。（文責 今川恭子）

6-2 学会誌バックナンバー セット販売のお知らせ

『音楽教育学』1号～34号，及び『音楽教育実践ジャーナル』1～2号（2004年度までの学会誌全72冊）を，限定先着8名の会員にセット販売いたします。ただし品切れになっている号がありますので，先着1名の方は4冊，次の4名は7冊，6人目は8冊，7，8人目は9冊がコピーとなります。

11号～34号の中でコピーが必要な号は簡易製本をいたします。価格は1セット6万円（送料別），申し込みは，Eメールのみでの受付とさせていただきます。

申込先：日本音楽教育学会事務局 onkyoiku@remus.dti.ne.jp

申し込み締切日：2006 年 5 月末日

（ただし限定数に達した時点で締め切らせていただきます）

記入必要事項：申込者名，連絡先住所，電話番号，送り先住所。

購入に際して書類が必要な場合は，その種類（見積書，納品書，請求書，領収書など）をお書きください。コピー作業は申し込み確定後に開始しますので，お届けまでには若干時間がかかります。ご了承ください。

<訂正>

ニューズレターNo. 22（平成17年12月26日発行）で、三戸誠会員のお名前に誤りがありました。訂正して、お詫び申し上げます。

P. 7 「国際交流委員会からのお知らせ」右段18行目
(誤) ・誠氏 (ヴィオラ) → (正) ・三戸誠氏 (ヴィオラ)

事務局から

昨年12月に滝浦さんが退職されて以降の事務局体制につきまして、報告いたします。引継ぎが十分とはいえない状態での新体制スタートでしたが、今のところ大きな支障なく業務を行っております。会員の皆さまには、ご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。

1) 勤務体制・担当

現在、三人の方が勤務してくださっています。簡単にご紹介します。

中村幸子さん（東京芸大楽理科卒）

月曜午前中、木曜勤務 主に学会誌関連業務担当

岩淵育子さん（東京学芸大修士修了）

月曜午前中、金曜勤務 主に会計業務担当

柴崎かがりさん（東京学芸大修士修了）

木曜、金曜勤務 主に会員管理業務担当

上記の担当は中心となる業務であり、お三方とも事務局業務全体を把握しておられます。また、発送業務などが集中する時期には、学芸大修士2年在学中の大石あゆ美さんにもお手伝いいただいています。

2) 業務時間など

現在の業務時間は次のようになっており、原則として2人体制をとっています。

月曜 10:00～12:00

木曜 10:00～16:30

金曜 10:00～16:30

2人体制とすることで、相談・確認しながら安心して仕事ができ、次の業務日への引継ぎもスムーズに行われ、チームワークも良好です。業務の集中する年度末、新年度を迎え、不安は多々ありますが、事務局長ともども協力して進めていきたいと考えています。不手際があるかもしれませんが、特に一通りの業務を経験するまでの1年間は、温かく見守っていただければと思います。会員の皆さまには、一層のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

編集後記

2月の常任理事会の折り、日本女子大の近くの講談社野間記念館に足を運んだ。そこには伊東深水の美人画とともに、日本の風景をうつす詩と日本画が飾られていた。後藤純男の「荒城の月」、平山郁夫の「ウミ」をはじめとする絵からは、作家が想起した深い詩情あふれる世界が広がり、いつの間にか絵から歌の世界へと引き込まれてしまった。音楽の授業において、情景を思い浮かべながら歌う活動があるが、バーチャルな世界に慣れた子どもたちにとって、直接体験に超したことはないが、美術館の空間と相俟って絵画が醸し出す感性を揺さぶる世界を、何よりも子どもたちに経験させてあげたいと心底思った心豊かな時間であった。ところで、今回のニュースレターは国内、国外トピックスへ複数の記事をいただいた。本学会と姉妹学会である韓国音楽教育学会との連携は、本学会のこれからに期待を持たせる内容であり、他学会のレポートは互いの学会の姿を垣間見る良い機会になっている。新刊案内では、初めての試みとして、著書の意図が伝わるようにと著者自身に紹介文を書いていただいた。今後、著書紹介を含め積極的な話題提供をお願いします。

(岩崎洋一)

3月に入り、生暖かい春雨に庭木が濡れて今年もまた庭の薔薇の芽を見えています。

紅の二尺伸びたる薔薇の芽の針やわらかに春雨の降る

その春雨に濡れる薔薇の紅が年を追うごとに胸を深く打つようになってきました。



(村尾忠廣)

【日本音楽教育学会役員（2005-2007年度）】

会長：坪能由紀子 副会長：岩崎洋一・加藤富美子

常任理事：小山真紀（事務局長）、佐野 靖・村尾忠廣（総務）

阪井 恵・島崎篤子・降矢美彌子（企画）今川恭子・奥 忍（会計）

岩井正浩（編集委員）

理事：寺田貴雄（北海道）、宮野モモ子・井口 太・熊木眞美子・山本文茂（関東）

小川昌文・篠原秀夫（北陸）、南 曜子（東海）

安田 寛・嶋田由美・若尾 裕（近畿）、小川容子（中国）、田邊 隆（四国）

木村次宏（九州）

【事務局住所】〒184-0015東京都小金井市貫井北町2-5-22ハイッシーダ1-102

【私 書 箱】〒184-8799東京都小金井郵便局私書箱26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://www.soc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>

